



アマゾン原産のフルーツ、アサイーのジュースで乾杯。「付加価値というか、単純にうまい」と宮沢さんも絶賛(写真提供: SARAVA)

FIELD SKETCH

宮沢和史さんがアマゾンの森で得たエネルギー

幅広い世代に親しまれている名曲「島唄」を生んだ宮沢和史さんが愛してやまない国、ブラジル。日本からブラジルへの移住が始まって100年目の今年、宮沢さんの14年来の夢だったというブラジルツアーが行われた。ツアー終了後、宮沢さんはJICA関係者らとともにパラ州トメアスを訪問し、100%生のアマゾン体験した。

文・写真 = 宮本 義弘 (JICAブラジル事務所員)
text and photos by Miyamoto Yoshihiro



ブラジル
BRAZIL

移住100周年記念ツアー

7月22日、パラナ州クリチバから始まった、宮沢さん率いるGANGA ZUNBAのブラジルツアー。最終日はブラジル音楽のすべてが凝縮された音楽の都、リオデジャネイロだ。公演は、ブラジル音楽界の大御所が演奏を行う由緒ある会場で開かれ、宮沢さんは日本人として初めてステージに立った。宮沢さんとブラジルの出会いは14年前。口ツクから沖縄民謡などさまざまな音に影響を受けてきた宮沢さんにとって、ブラジル音楽にたどり着くのはごく自然の流れだったよう。以来、何度もブラジルに足を運ぶ

宮沢さんとJICAとの出会い

中で、日本人移住者の存在の大きさに気づき、移住100周年の節目の年にブラジルでツアーを行い一緒に祝う、ということに夢に掲げて活動を重ねてきたという。その夢が実現した夜、宮沢さんに訪れたのは意外にも虚脱感や虚無感。全身全霊を捧げて夢を追い続けてきて、当然、達成感や喜びを味わえるものと考えていたそう。そんな彼を襲った虚無感が、その後、鮮やかな色彩を帯びて新しい世界に変わっていく瞬間に立ち会う幸運を得た。

翌30日夜、アマゾン川河口の都市ベレンにおいて、Tシャツにジーンズ、ニット帽といういでたちで登場した宮沢さんは、今思えば、あの有名アーティストが解き放つオーラが少し影を潜めていたかもしれない。その日は日本テレビの取材クルーと



トメアス総合農業組合のジュース加工工場。後ろに見える小屋は初期の工場。最初の工場とトラックはJICAの支援で導入したもの

宮沢さんチーム、JICAによる簡単な打ち合わせと食事が行われた。メニューは、宮沢さんも熱望していたというアマゾン地域特産のスープ料理で、アマゾンの魚や野菜を土鍋で煮込んだもの。大きな具材の豪快なスープを、何度も「うまい！」と絶賛していた。

宮沢さんが初めてベレンを訪れたのは半年前。ベレンから約200キロ南にある日系移住者が開拓したといわれるトメアスで、日系人農家が築き上げたアグロフォレストリーを目にし、強く心を揺さぶられたそう。それ以来、すっかりアマゾンのナチュラル・エネルギー「アサイー」の虜(とら)になってしまった宮沢さんは、アマゾンフルーツを

材料とするジュースなどの販売を手掛けるフルッタ・フルッタ社の2008年度ベスト・アサイーニストに選ばれる。そこからJICAとの接点が生まれた。JICAは長年、持続的な農業の手段として、アグロフォレストリーの技術開発と普及に向けた支援を続けている。古くはトメアスの日系人農家に対する農業指導に始まり、1999年から5年間、ブラジル農牧研究公社の東部アマゾン研究所に対し、持続的な農業の研究を促進するための技術協力を行った。その成果を受けて、現在、アマゾン周辺国を対象とした第三国研修を支援している。研修では、トメアスのアグロフォレストリーを紹介し、現場実習の機会も設けている。

ことになった。アグロフォレストリー体験 7月31日、朝4時に始まるアサイー市の取材の後、ホテルで宮沢さんグループと合流し、空港へ。6人乗りの飛行機に宮沢さんと並んで座ることになった筆者は、思いがけずピンマイクをつけられ、本来なら30分

1 9月に「NEWS ZERO」で放映予定。



毎朝4時から始まるアサイー市。約15キロ入る籠1つが15レアル(約1,000円)で売られる。明るくなるころには商いがほぼ終わっている

また、07年にはこれまでのアグロフォレストリーの経験をマルチメディア教材として取りまとめた。そのビデオが、なんとフルッタ・フルッタ社のベスト・アサイーニスト2008でアグロフォレストリー部門を受賞。そこから宮沢さんとJICAのコラボレーションが始まった。今回、アグロフォレストリーを「未来の農業」という宮沢さんのブラジルに対する熱い思いを伝えようと、日本テレビが番組¹を企画し、その取材にJICAが協力する



79年前に日本人移住者がたどり着いた棧橋に立つ宮沢さん。「80年、100年という時間の長さを感じますね」(写真提供: SARAVA)



森林伐採の激しいパラ州タイランジア上空付近。伐採跡地にバイオディーゼル用と思われるヤシが整然と植えられている

が期待していることなどを説明した。アマゾンの森林伐採を目の当たりにした宮沢さんは、想像以上の破壊に驚きつつも、「日本の進んだ技術がブラジルの取り組みを支援することは非常に重要です」と強い関心を抱いたよ。

森林伐採の激しいパラ州タイランジア上空を通過し、トメア上空に近づくとアグロフォレストリー農家が見えてきた。「自然の力強さを感じますね」と宮沢さん。大きな破壊を目にした後に、小さいながらも、森を復活させようとする努力を見て、少し安心したよ。



2年目のアグロフォレストリー農場の前で。コショウの間に 카카오などの熱帯果樹が植えられ、10年もすると森のようになる

到着するところを、アマゾンを知ってもらうために内陸に大きく迂回して約2時間のフライトとなった機内で、森林伐採の現状と、それに対する日本の支援²、トメアスにおけるアグロフォレストリーにJICA

を見て、少し安心したよ。飛行機は滑走路が1本あるだけのトメアス空港に到着。そこから車に乗り、家族3世代でアグロフォレストリーに取り組む日系人農家宅を訪問し、実際にアグロフォ

ストーリーを体験してもらった。刀をベルトに差して「出来の悪い後継ぎ息子」などと自分を揶揄しながらも、農作業を体験し、本当の後継ぎである長男の説明に熱心に耳を傾けていた。

² 「アマゾン環境保全・環境犯罪防止のためのALOS衛星画像の利用プロジェクト」。宇宙航空研究開発機構(JAXA)などの日本の衛星情報を活用した森林モニタリングシステムの改善や人材育成支援。



祝賀会に集まった人々の前で熱唱する宮沢さん

さや時間の概念のスケールの大きさを感じさせられますね。アマゾンの伐採に対して、アグロフォレストリーはまだ小規模だが、100年後の姿を想像して明治神宮の森をつくった先人たちのように、それくらいのスケールで考えないといけない。僕ができることは小さいけれど、それを知ってしまった僕は、そのことを伝えていかなければならない」と語った。

アグロフォレストリーは荒廃した森の回復¹、二酸化炭素の吸収、農家の収入向上など、さまざまな効果が見込まれる持続可能な農業形態として注目を浴びている。しかし、大規模に機械化された農業に比べて、コストがかかることも確か。製品の加工と市場

の好循環」が生まれることを願う。

レストリーが産み出す熱帯のジュースやチョコレートを都会の人々が消費することで、アマゾンの森が回復する。今回の取材を機に、そんな「地球に優しい食料生産と消費



開かれ、200人近い日系移住者が集まった。宮沢さんはその会場で、移住100周年を記念して作った「足跡のない道」と「鳥唄」を披露してくれ、歌い終わると大きな拍手が会場に響き渡った。

リオの最終公演後、虚脱感に襲われた宮沢さんは、アマゾンの太陽、日系移住者のたくましい生きざま、そこから生まれたアマゾンの果実……それらとの出会いを重ねるうち、次第に心に色彩を取り戻していったよ。そして、「ここに来ると、広

大規模に機械化された農業に比べて、コストがかかることも確か。製品の加工と市場



カカオの日干しの手伝いをする宮沢さん。周りにはカカオの甘い香りが充満している

宮沢さんのブラジル訪問の様子を展示した「宮沢和史とブラジル～これまでの100年、これからの100年」と、音楽フェスタが9月に横浜市で開催される。詳細は45ページを参照。